

4 1 【ふるぼく】

嵐の夜に外へ出たりすると、倒れた太い樹木に躓いてよく転んだものです。

どうして嵐になると、あんな立派な木でも倒れるのか、それが解らなかつたものです。

懐爺にきいたら、

「それはおぼけですから、わざと倒れているのです」

との答えが返って来ました。

「わざとたおれるのは、なぜじゃ」

「金ちゃんみたいに嵐の夜でも外出する危ないこどもがいるから、注意をしているのです。決していたずらをしているのではありません」

「おまえのほうがあぶないじゃろ」

ぼくは樹木に毒づいたのです。

「とんでもない。嵐の夜は、倒れた樹木よりもずっと危ないおぼけが、いっぱいいるのです」

懐爺がいうなら、そうにちがいません。

樹木は本当は嵐くらいでは倒れないのだけれども、注意を促すために倒れるのであるとのこと。

「かんしんなおぼけじゃのう」

ほとんどのおぼけが感心するおぼけなのだけれども、格別だとおもわれしました。

「【ふるぼく】というおぼけです。昔は【ふるき】とあったのですが、明治時代に古木さんという人が抗議して、【ふるき】とはいわなくなりました。【ふるぼく】は〈古〉と〈木〉という漢字ではなくて、本当は〈震〉と〈木〉なんですがね。嵐で震える大木という意味です」

それは抗議したくなるのは当たり前です。

【きんちゃん】というおぼけがいたら、ぼくだって抗議したでしょう。

「【ふるぼく】かあ。ふるいぼくなら、かいじいもおんなじじゃ」

ぼくは少々、駄洒落をいいました。

懐爺は微笑んで、こういいました。

「たしかにわたしもおぼけかもしれませぬ。人間とおぼけのちがいなん

か紙一重（かみひとえ）ですからねえ。【ふるぼく】だって、普通の樹木との違いはあんまりない。いささか年取ったのと、いささか弱ったのと、いささか老婆心（ろうばしん）が芽生えただけにすぎません。あれでもわかひころは、無鉄砲でわからずやで、【とうへんぼく】ともよばれていました」

「ろうばしんたあ、なんじゃ」

「老婆心とは年寄りの心です。年寄りは沢山の経験がありますから、嵐の夜にこどもが外出することを、とても危険だとわかっています。ですからおせっかいとおもいつつも注意をするのです」

「としよりのいうことは、きかんといけんのう」

ぼくがそういうと、懐爺は初めて声をだして笑いました。

ほっ

ほっ

ほほほ

ほん

漫画でみた大むかしの、貴族の笑いにそっくりでした。

懐爺は乞食でも浮浪者でもなく、本当は貴族なのかもしれない。

乞食にしてはすごく物知りだし、浮浪者にしてはめったに祠を動かない。

「金ちゃんはわたしのいうことをきくから、ぜったいに末は博士か大臣です」

懐爺はお世辞をいいました。

懐爺は貴族かもしれないが、預言者ではない。

ぼくは博士にも大臣にも、それと同等の偉い人にもなれなかったから。